

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

足尼(宿禰) 小考 : 埼玉県稻荷山古墳出土鉄剣銘文 系譜に関連して

著者	前川 明久
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	33
ページ	17-28
発行年	1981-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/10271

足 尼 (宿 禰) 小 考

——埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘文系譜に関連して——

前 川 明 久

—

昭和五十三年、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣から発見された銘文は、五世紀史の解明に貴重な手がかりをあたえ、こんにちまで多くの研究成果が発表された。なかでも銘文に記された平獲居臣(直)の上祖意富比埜以下八代の系譜に見える人名につけられた称号と姓は、氏姓制成立以前の政治体制を理解するうえに貴重である。いま、それを列挙すると左の通りである。

初代 上祖名 意富比埜、
 二代 其児 多加利足尼、
 三代 其児名 呂己加利獲居、
 四代 其児名 多加披次獲居、
 五代 其児名 多沙鬼獲居、
 六代 其児名 半旦比
 七代 其児名 加差披余
 八代 其児名 乎獲居臣(直)、

足尼(宿禰)小考(前川)

なお、八代の乎獲居臣は直ともよまれているので、ひとまず(一)をつけた。埼玉県教育委員会『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』(昭和五十四年二月刊)には、右の人名にふくまれる比埜は「ヒコ」とよまれ「意富比埜」は「オホヒコ」であり、足尼は「スクネ」、獲居は「ワケ」とよまれている。このヒコ・スクネ・ワケなどを姓(カバネ)成立以前のものとして称号というが、銘文系譜には比埜(ヒコ)―足尼(スクネ)―獲居(ワケ)―獲居―獲居―〇―〇―獲居臣(直)とみえ、称号から姓への変遷が明確にみとれるのである。

ところで、ヒコやワケなどの個々の称号やこれらの称号から姓への変遷についての考察も、すでに多くの見解が発表されているが、スクネについては考察された論考がきわめて少なく、原島礼二氏が「大小の氏族について、その祖先の名にスクネという称号をつける習慣は、銘文により五世紀には存在したといっている⁽³⁾」と指摘されたにとどまっている。銘文発見以前にはスクネの研究は、太田亮氏『日本上代に於ける社会組織の研究』第四編第

二十三章の「宿禰」をはじめとして、渡辺直彦氏「宿禰の史的意義―記紀の批判を通して」（『国学院雑誌』六三卷一〇・一一号）があり、筆者も「大化前代の宿禰（足尼）について」（『歴史評論』一六四号）で考察したが、全般的にきわめて不活発であった。その理由はスクネが天武八姓の一つであり、大化前代にみえるスクネは、たとえば建内宿禰などのように伝承上の人名にふくまれているので、実在のものとは考えられていなかったためであろう。

今回の銘文の発見によって、スクネは五世紀において称号として用いられていたことがたしかめられたのである。これを機会にあらためて旧稿をよみなおしてみると不備が多く、とくに氏姓制成立の前提となっている五世紀におけるスクネの称号が、他のヒコ・ワケなどの称号とどのような関係をもっていたのかについて指摘するところがなかった。そこで小稿ではスクネについて再考し、旧稿の欠を補なうとともに、あわせて銘文系譜にみえるスクネの史的意義を述べてみたい。なお、銘文の冒頭にみえる「辛亥年」は四七一年とみて、以下の考察をすすめることを付記しておきたい。

二

足尼は、上野三碑の山上碑文に「斯多々弥足尼」、天寿国繡帳銘に「伊奈米足尼」などとみえ、『新撰姓氏録』・『旧事記』などにも足尼をふくむ多くの古代人名をみることができ、宿禰の古い表記であって、続日本紀、宝亀四年五月辛未条に「又其天下

氏姓青衣為采女。耳中為紀。阿曾美為朝臣。足尼為宿禰。諸如此類。不必從古」とみえることから理解できる。

さて、銘文系譜にみえる人名は、初代「意富比埜」が、孝元記に「大毗古命之子建沼河別命者阿倍臣等之祖」とみえ、孝元紀に「兄大彥命、是阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狭々城山君・筑紫国造・越国造・伊賀臣、凡七族之始祖也」とみえ、また崇神十年紀九月条に四道將軍の一人として北陸に派遣された大彥命に比定されているほか、『皇太神宮儀式帳』に川俣県道らの遠祖を大比古と記し、孝靈記に吉備上道臣の祖大吉備津日子命と吉備下道臣・笠臣の祖若日子建吉備津日子命をあげていることを対比すると、遠祖を一般に「オホヒコ」とよぶことがあったかもしれないとみられている⁽⁴⁾。以外は、記紀やその他の古代史料に比定されるべきものが見あたらない。しかし、さきに述べたように、銘文系譜の人名にみえる称号からカバネへの変遷が、記紀の人名にみえる称号からカバネへの変遷と対応しているので、やはり記紀にみえるこれらの称号やカバネの考察を手がかりとして、銘文系譜にみえる称号やカバネを考察することが可能であると考えられる。そこで、記紀にみえる「スクネ」をふくむ人名をあげてみると、左の表の通りである。

天皇	人	名	後裔氏族	備考
安寧	大間宿禰（紀）			
孝元	味師内宿禰（記）		山代内臣	
〃	建内宿禰（記紀）			

孝元	波多八代宿禰(記)	波多臣・林臣・波美臣・星川臣・淡海臣・長谷部之君	建内宿禰の子
"	許勢小柄宿禰(記)	許勢臣・雀部臣	"
"	平群都久宿禰(記)	平群臣・佐和良臣・馬御・連	"
"	木角宿禰(記)	木臣・都奴臣・坂本臣	"
"	蘇賀石河宿禰(記)	蘇我臣・川辺臣・田中臣・高向臣・小治田臣・松井臣・岸田臣	"
"	若子宿禰(記)	江野財臣	"
開化	葛城之垂見宿禰(記)	(葛城臣)	
"	志夫美宿禰王(記)	佐々君	
"	息長宿禰王(記・紀)		
崇神	大水口宿禰(紀)	穗積臣	
"	大海宿禰(紀)		
垂仁	野見宿禰(紀)	土部連	
"	長尾市宿禰(紀)	倭直	
景行	忍山宿禰(紀)	穗積臣	
仲哀	伊佐比宿禰(記) Ⅱ	難波吉師	
神功	五十狹茅宿禰(紀)	津守連	
"	田袋見宿禰(紀)		
"	斯摩宿禰(紀)		
"	建伊那宿禰(記)	尾張連	
応神	大浜宿禰(紀)	阿曇連	

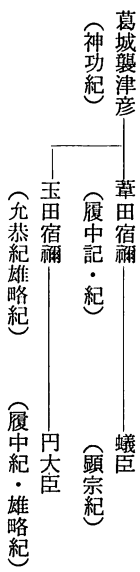
"	紀角宿禰(紀)	(紀臣)	後裔氏族のうち
"	羽田矢代宿禰(紀)	(羽田臣)	記にみえな
"	石川宿禰(紀)	(蘇我臣)	の明らかなものである。
"	木菟宿禰(紀) Ⅱ平	平群臣	
"	群木菟宿禰(紀)		
"	甘美内宿禰(紀)	(山内代臣)	
"	的戸(祗) 田宿禰(紀)	(的臣)	
仁德	渺宇宿禰(紀)	出雲臣	仁德紀にもみえる
"	吾子籠宿禰(紀)	大倭国造(倭直)	
"	盾人宿禰(紀)	的臣	
"	宿禰臣(紀)	小泊瀬造	
履中	草田宿禰(記・紀)	(葛城臣)	賢遺臣と賜姓葛城襲津彦の子
"	物部大前宿禰(紀)	(物部連)	
"	Ⅱ大前宿禰大臣(九恭記)		
允恭	蘇賀滿智宿禰(紀)	(蘇我臣)	
"	小前宿禰大臣(記)	(物部連)	
"	玉田宿禰(紀)	(葛城臣)	葛城襲津彦の子
雄略	坂合部連賀宿禰(紀)	坂合部連	
"	吾子籠宿禰(紀)	大倭国造(倭直)	
"	紀小弓宿禰(紀)	(紀臣)	
"	蘇我韓子宿禰(紀)	(蘇我臣)	
"	小鹿火宿禰(紀)	(紀臣?)	
"	紀大磐宿禰(紀)	(紀臣)	角臣の祖ともみられている

雄略	物部菟代宿禰(紀)	(物部連)	
顯宗	韓倭宿禰(記・紀)	狭々城山君	
"	倭倭宿禰(紀)	"	
"	押見宿禰(紀)	右の人名と同族	
宣化	蘇我稻目宿禰(紀)		
	宗賀之稻目宿禰(記)		
欽明	紀男麻呂宿禰(紀)		
敏達	蘇我馬子宿禰(紀)		
		三代実録に忍見足尼命とみえる	

右の表をみると、スクネをふくむ人名は第三代安寧天皇から第三〇代敏達天皇にいたるまでみられる。皇族名にふくめられているのは、わずか二例であって、他はほとんど人名の下にスクネを付し、なかには氏名プラス人名プラススクネの形式をとっているものもあることから、スクネはむしろ氏族の人名と関係深いものであったと考えられる。

スクネを付した人名の後裔氏族は不明なものもあるが、後の時期にいたるまで継続的にあらわれる後裔氏族についてみると、その大部分は大和を中心としその周辺をふくむ地域に本拠をもつ畿内豪族が多く、葛城・平群・物部・紀・蘇我などの諸氏があげられる。尾張連・江野財臣・出雲臣など地方豪族を後裔としているものもあるが、それは少数である。また後裔氏族のカバネをみると、君姓3、臣姓27、連姓8、直姓1、造姓1、県主姓1、吉師姓1であって、臣姓が圧倒的に多い。

その後裔氏族の代表例として葛城氏についてみよう。葛城氏が五世紀に天皇家と対立する勢力をもっていたことについては、すでに井上光貞氏の研究によって明らかであるが、⁽⁵⁾書紀によって同氏の系譜を示すと左の通りである。



この系譜をみてもわかるように、彦・宿禰・(大)臣とあって、称号からカバネへの変遷が理解できる。葛城襲津彦は神功六十二年紀所引の百濟記に「沙至比曉」とみえ、朝鮮との交渉に活躍しており、四世紀末から五世紀にかけて実在した人物とみられている。草田宿禰は葛城襲津彦の子であり、円大臣は雄略天皇の同母兄にあたる安康天皇を殺した眉輪王をかくまったため、雄略天皇に攻められ自尽した人物である。この兩名の人名にふくまれている草田と円が、⁽⁶⁾こんにち奈良県北葛城郡と御所市に地名として残っていることから、おそらく右の兩名はそれぞれの地に割拠した葛城氏の一族であったとみられ、ともに実在性にとむ人名と考えられる。円大臣の自尽によって葛城氏は没落するが、その時期は五世紀後半の中頃にあたる。草田宿禰や玉田宿禰の実在期間は明らかにしたいが、葛城襲津彦の実在年代から推察して五世紀前半頃と考えられる。そして、この時期には葛城氏は人名にヒコの称号をつけることをやめ、スクネをつけるようになったことが理解できる。また「蟻臣」につけられた「オミ」や「円大臣」

が「円大使主」(履中二年紀十月条)とも書かれていることなどから、オミはカバネではなく尊称とみられ、後のように氏の名につく臣姓とは関係がなかったと説かれているが、崇峻即位前紀には葛城臣烏那羅(同四年紀には葛城烏奈良臣)とみえ、葛城氏が後に臣のカバネを称することからも、円(大)臣、蟻臣のオミも臣がカバネとして用いられる萌芽を示したものの(カバネ的称号)と考えられ、ここにスクネの称号からカバネ的称号臣への移行を認めることができるのである。

右にみた葛城氏の系譜は、それにみられる人名の实在が認められることから、信頼性にとむのであるが、これを基準として前掲のスクネをふくむ人名の表をみると、四世紀の七〇—九〇年代に在位していた天皇とみられる応神以前の人名は、後裔氏族の伝承のなかにみえるものが多いので、以後の考察から除外したほうがよいであろう。とくに、建内宿禰を祖とする古事記分注系譜の成立は天武十三年にほど近い頃とみられていることから、この系譜にみえるスクネをふくむ人名の实在性は乏しい。なお、応神から仁徳紀にかけて紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・平群木菟宿禰・吾子籠宿禰・的戸田宿禰など一群の朝鮮派遣氏族がみえる。これらの後裔氏族は雄略紀にもみえ、実際にこれらの氏族が朝鮮経営にたずさわったのは、紀氏が五世紀後半に、的氏が六世紀中葉以降に、蘇我氏は韓子宿禰が新羅・百濟へ紀氏とともに派遣されているので(雄略九年紀)、だいたい雄略朝以降と考えられる。したがって応神から仁徳紀にかけてこれらの後裔氏族の

祖にあたるスクネをふくむ人名がみられるのは、六世紀以降において、これらの氏族はその祖先が四世紀末に行なわれた大和朝廷の朝鮮経営にも参加してはならないという意識のもとに、それらの人名と事績を加上・述作したのとも考えられる。また、応神から仁徳紀にみえるスクネをふくむ人名の後裔氏族の一部は、孝元記にみえるそれと共通するもの(たとえば平群臣・木臣など)もあるので、その实在性はきわめて乏しい。

さらに、仁徳紀の出雲臣の祖淤宇宿禰は、大和朝廷による出雲平定が六世紀にほど近い頃行なわれたとみられていることから、仁徳朝の人とするのは疑問であり、履中・允恭紀の物部大前・小前宿禰の末尾にみえる「大臣」は、物部氏のカバネ連と矛盾しているので造作した可能性が強く实在の人名とは考えられない。

このようにみえてくると、前掲のスクネをふくむ人名のうち、おおむね履中以降にみえるものがその实在をたしかめられる。あらためてその後裔氏族をみると、葛城・物部・平群・蘇我の諸氏のほか建内宿禰の後裔と伝える紀(臣)氏など、五世紀において大和朝廷に対立し、あるいは朝廷の中核となった臣・連姓の畿内有力豪族が多く、スクネはこれらの諸豪族の祖が人名につけていた称号であったと考えられるのである。

ここで顕宗紀にみえる近江狹狹城山君の祖韓倭宿禰と倭倭宿禰、宍伎の押見宿禰について述べておきたい。前者の韓倭宿禰は雄略天皇とはかり市辺押磐皇子を殺したので陵戸にあてられ、倭倭宿禰は皇子の屍の所在を教えたので、殊の置目の功により本

姓狹狹城山君に復した記事が顯宗元年紀五月条にみえる。おそらく、韓侂宿禰と倭侂宿禰は大和に居住していた実在とみなされる人名と考えられる。なお、スクネをふくむ人名をもつものが、君のカバネを賜与されていることに興味をひかれる。さらに、押見宿禰の後裔氏族である壹伎県主は、後に壹伎直としてみえる国造であり、おそらく国造とともに中央に上番しまたは永住して祭祀・亀卜を事とした氏族であろうが、あるいは大和に上番したものの祖の人名にスクネを付したのかもしれない、押見宿禰の実在をたしかめることはできない。

ところで、スクネは大和を中心とし、その周辺に本拠をもつ畿内豪族の用いた称号とみたが、それをいつ頃用いていたのであろうか。さきに葛城氏の系譜で検討したように、葦田宿禰・玉田宿禰は五世紀前半頃の実在人名とみられること、円大臣が雄略天皇に滅ぼされ葛城氏の没落が五世紀後半の中頃であったとみられることなどを念頭に置くと、スクネの称号を畿内豪族が使用していたのはおおむね五世紀前半から後半にかけての時期となる。これに関連して考慮しなければならないのは、スクネを天皇の和風称号にふくむ「男浅津間若子宿禰」(記)・「雄朝津間稚子宿禰」(紀)・「允恭天皇に注目される。この天皇は『宋書倭国伝』にみえる倭王済に比定されており、その没年代が四六〇年とみられており、スクネは五世紀中葉に天皇の称号として用いられていたこと⁽¹³⁾とがわかる。つまり、天皇は大和を中心としその周辺をふくむ地域を本拠とした畿内豪族とスクネの称号を共称していたのである。しかも、スクネをふくむ天皇の和風称号は、応神(品陀和氣

〈記〉・誉田別〈紀〉・履中(伊耶本和氣〈記〉・去来穗別〈紀〉・反正(水齒別〈記〉・瑞齒別〈紀〉・顯宗(袁祁王之石巢別〈記〉・弘計〈紀〉)など、ワケの称号を和風称号にふくむ諸天皇が五世紀中葉以降に「大王」と称し超越的な権力体となってゆく過渡期にあらわれ、畿内豪族とこれを共称していたことに注目される。

ワケの称号を四世紀末から五世紀前半代の諸天皇および皇族と地方豪族が共称した史的意義については、すでに佐伯有清氏の論考に尽されている。⁽¹⁴⁾ただ、スクネの称号を考察するうえで指摘しておきたいのは、記紀にみるかぎりワケをふくむ氏族名あるいは人名のうちで、スクネをふくむ氏族名あるいは人名の祖になっているものも、その逆の場合も見あたらす、またスクネはワケとは異なり後世氏の名として用いられた例が一つもないことである。

これはスクネの称号がワケと同じく五世紀代に天皇・豪族と共称されたにしても、両者の共称範囲や性格が異なっていたことを暗示しているのではあるまいか。古事記にみえるワケ姓氏族二四例、書紀六例計三〇例のうち、畿内に分布するものはわずかに八例(大和Ⅱ山辺之別〈山辺郡〉・阿太之別〈宇智郡阿陀郷〉・沙本穴太部之別〈添上郡佐保〉、摂津Ⅱ牟礼之別〈島下郡牟礼神社〉、和泉Ⅱ血沼之別・父努別〈茅渟県〉、山城Ⅱ葛野之別〈葛野郡〉・深河別〈葛野郡深川神社〉)であって、その分布がきわめて少なく、ワケの称号は主として畿内以外の地方豪族がとなえていたのではないかと考えられる。つまり、ワケの称号は地方豪族が用いていたのに対し、スクネの称号は主として大和を中心としたその周辺の畿内豪族、なかでも大和朝廷に対立しあるいは朝廷の中樞を

構成していた有力豪族が用いたものであったと考えられるのである。⁽¹⁶⁾ いいかえれば、四世紀中葉以降から五世紀代にかけて国土平定を行なった諸天皇は、まずワケの称号を地方豪族と共称し、ついで五世紀中葉には大和を中心とした畿内有力豪族とともにスクネの称号を共称し、さらにその後半には畿内あるいは地方豪族に超越する権力体として「大王」を称するようになったとみられるのである。

三

さて前節で、スクネは五世紀前半から中葉にかけて、主として大和を中心としその周辺をふくむ地域に本拠をもつ畿内豪族が用いた称号であって、五世紀中葉には天皇もこれを共称したと指摘してきたが、本節では五世紀後半以降においてこの称号はどのような変遷をたどったかについて、記紀によって検討してみたい。

そこで、スクネの称号を人名にふくむ豪族のうち、記紀において各時期に継続的に人名のみえる葛城・平群・物部・蘇我・紀などの諸氏の人名を検討の素材として摘記すると、左の通りである。人名の出典は初見のみを記し、記事掲出の下限は人名にスクネをふくまず、臣・連などのカバネをふくむ史料の見える時期までで区切った。また、后妃となった女性名は除いた。

〔葛城氏〕

葛城之垂見宿禰（開化記）

葦田宿禰（履中記・履中元年紀）

円大使主（履中二年紀） 〓 円大臣（雄略即位前紀）

足尼（宿禰）小考（前川）

玉田宿禰（允恭五年紀）

蟻 臣（顯宗即位前紀）

△葛城直難波（欽明三一年紀）

△葛城直磐村（用明元年紀）

葛城臣烏那羅（崇峻即位前紀）

△は葛城国造家の出身で五世紀の葛城氏との系譜関係が不明であり、あるいは別氏ともみられる。

〔平群氏〕

平群都久宿禰（孝元記）

平群木菟宿禰（応神三年紀）

平群臣真鳥（雄略即位前紀）

大臣真鳥臣（武烈即位前紀）

平群鮪臣（武烈即位前紀）

平群臣神手（崇峻即位前紀）

〔物部氏〕

物部連遠祖十千根（垂仁二五年紀） 〓 物部十千根大連（垂仁二

六年紀）

物部胆咋連（仲哀九年紀）

物部大前宿禰（履中即位前紀） 〓 大前宿禰大臣（允恭記）

物部伊菟弗大連（履中二年紀）

物部長真胆連（履中三年紀）

（物部）小前宿禰大臣（允恭記・安康即位前紀）

物部連目（雄略即位前紀） 〓 物部目大連（雄略元年紀）

物部菟代宿禰（雄略十八年紀）

物部鹿鹿火大連（武烈即位前紀） || 物部大連鹿鹿火（繼体六年紀）

物部至至連（繼体九年紀）

物部伊勢連父根（繼体二三年紀）

物部大連尾興（安閑元年紀） || 物部尾興大連（欽明即位前紀）

物部施德麻奇牟（欽明四年紀）

物部連奈率用奇多（欽明五年紀）

物部奈率奇非（欽明五年紀）

物部 鳥（欽明十五年紀）

物部莫奇武連（欽明十五年紀）

物部弓削守屋大連（敏達元年紀） || 物部弓削守屋連（用明即位前紀）

前紀）

物部 八坂（用明二年紀）

〔蘇我氏〕

蘇我石川宿禰（孝元紀）

蘇賀滿智宿禰（履中二年紀）

蘇我韓子宿禰（雄略九年紀）

宗賢之稻目宿禰（宣化紀） || 蘇我稻目宿禰（宣化元年紀）・蘇

我大臣稻目宿禰（宣化元年紀）・蘇我稻目宿禰

大臣（欽明即位前紀）

蘇我馬子宿禰

（敏達元年紀）（敏達十三年紀） || 蘇我馬子大臣（敏達三年紀）・馬子宿禰大臣（敏達四年紀）

・蘇我大臣馬子宿禰（敏達十四年紀）・蘇我大臣（推古十一年紀）

蘇我豐浦蝦夷臣（推古十八年紀） || 蘇我蝦夷臣（舒明即位前紀）

・蘇我臣蝦夷（皇極元年紀）

蘇我臣入鹿（皇極元年紀）

〔紀氏〕

木角宿禰（孝元紀）

紀角宿禰（応神三年紀）

紀小弓宿禰（雄略九年紀）

紀大磐宿禰（雄略九年紀）

紀臣奈率禰麻沙（欽明二年紀）

紀男麻呂宿禰（欽明二三年紀）

紀臣塩手（舒明即位前紀）

右の人名をみるとわかるように、○○宿禰のように人名にスクネだけをふくむものと、「蘇我大臣稻目宿禰」のようにスクネに臣などのカバネをつけている例がみられる。『旧事記』には「物部吳足尼連」、「新撰姓氏錄」では「伊己止足尼大連」などのようにスクネに連のカバネをつけた人名表記もある。こうようにスクネの称号と臣・連のカバネとが併記されているのは、スクネがカバネでないことを示しており、しかもスクネが称号として用いられていた五世紀から遠ざかるにしたがって、たんなる尊称と化し、カバネの臣・連に移行してゆく過程をうかがうことができる。

それでは、称号スクネがカバネ臣・連に変化する時期はいつであらうか。右に掲げた人名で、スクネをふくむものから臣・連などのカバネをふくむもののみえる時期を検討することが一つの手

がかりとなろう。この時期は氏族によって異なり、たとえば葛城氏は「蟻臣」のように顕宗紀にあらわれ、「葛城臣」（崇峻紀）にみるようになり後に臣のカバネに固定する。もともと「蟻臣」など五世紀の人名にふくまれている臣は、さきに述べたように尊称（カバネの称号）とみる説もあるが、カバネの称号の臣は後にカバネの臣につながるもので、葛城氏は称号スクネからカバネの称号の臣に変化したのは五世紀後半の頃とみてよいであらう。

この点で平群氏も同じであるが、物部氏の場合は「伊弉弗大連」などの連のカバネをもつものが履中・雄略紀にみえ、「菟代宿禰」のように称号スクネをもつものが雄略紀にみえるなど複雑である。しかし、同氏も雄略朝の五世紀後半の頃には称号スクネからカバネの称号連に、さらにカバネ連に変化したとみてよいのではあるまいか。

残る蘇我氏と紀氏は、さきの三氏と異なり、六世紀になってもスクネをふくむ人名がみられる。しかし、蘇我稲目や馬子の人名表記にみえるスクネはカバネ臣と併記されていることから、もはや尊称にすぎないものであって、人名表記の重点は臣にある。このように考えれば宣化紀には稲目の人名に「臣」がふくまれているので、蘇我氏も六世紀前半の頃には臣のカバネに変化したと考えられる。この点は紀氏も同様であって、欽明紀にはスクネをふくむものと臣をふくむ人名をみるが、この場合もスクネも称号から尊称化したものであって、紀氏も六世紀前半には臣のカバネに変化したとみられるのである。このように氏族によって遅早はあるものの、称号スクネからカバネの称号あるいはカバネの臣・

連に変化した時期は五世紀後半から六世紀前半にかけてであったとみて大過あるまい。

ところで、五世紀に物部氏とならぶ軍事的氏族であった大伴氏にスクネをふくむ人名が見あたらない。ただし、同氏は天武八姓のうち宿禰を賜与されるので、天武朝以降にはその人名がみえる。また、阿倍氏も同様であって、スクネをふくむ人名のみえる氏族とみえない氏族とは、その成立あるいは性格にどのような相違があったのか、今後検討を要する課題であらう。

なお、スクネの原義について、中田薫氏の高句麗官名起源説⁽¹⁷⁾や名の下にそえてその人を敬う意味の語とみる太田亮氏の説もあるが、不明といわざるをえない。しかし、さきに述べたようにスクネの称号が後にカバネの臣に変化していることから、臣を「仕えるもの」⁽¹⁹⁾の意にとれば、さしずめスクネには、その系譜に多くの後裔氏族をもち、伝説に語られている建内宿禰の祖先像が示すように、大和朝廷に古くから仕えた祖という意味がこめられていたのではあるまいか。

四

上來、記紀にみえるスクネをふくむ人名の検討を通して、スクネの史的意義について種々考察してきた。これまで述べた諸点を要約するならば、スクネは五世紀前半から後半にかけて、主として大和を中心としその周辺に本拠をもち、大和朝廷を構成していた畿内豪族が人名に付してとなえていた称号であって、天皇もその称号がワケから大王に変化する過渡期にあたる五世紀中

ヒコについてスクネが五世紀代において畿内豪族に用いられていた称号であったこと、さきにみた葛城氏の祖先系譜に「葛城襲津彦―草田または玉田宿禰」とみえることから、⁽²³⁾「上祖名〇〇彦―其兄△△宿禰(足尼)」という系譜の類型が五世紀中葉において畿内豪族のあいだに成立していたとみてよいであろう。⁽²²⁾

筆者は、三代呂已加利獲居以下の人名は武蔵の豪族の人名ではないかと旧稿で指摘したが、二代の「多加利足尼」については考えが及ばなかった。さきの考察で述べたように獲居(ワケ)は地方豪族のとなえた称号であって、畿内豪族の称号としての足尼(スクネ)とは別系統である。したがって、「多加利足尼」は畿内人のように考えられるが、これも武蔵の豪族の人名で、平獲居臣(直)の祖にあたり、あるいはもとの名は「多加利」であったと推察される。「多加利」の名が三代の「呂已加利」と「加利」で共通していることから、武蔵の豪族の人名であり乎獲居臣(直)の祖であったことを暗示させるのである。

この鉄剣は乎獲居臣(直)が獲加多支鹵大王(雄略天皇と考定されている)⁽²⁴⁾から賜与されたものであらうと考えられるが、乎獲居臣(直)は阿倍氏の輩下にあつたことから、⁽²⁵⁾鉄剣に自己の祖先系譜を刻ませるさい、畿内豪族のあいだに成立していた「〇〇彦―△△宿禰(足尼)」の系譜類型のヒコにあたる人名に阿倍氏の祖大彦(意富比埜)を、スクネにあたる人名に自己の祖多加利をあてて「多加利足尼」とし、阿倍氏の祖に多加利以下の自己の系譜を結びつけたのではあるまいか。このようにして、鉄剣にみる銘文系譜は述作されたと考えられるのである。また、右のような

「ヒコ―スクネ」の系譜類型が五世紀中葉以降の畿内豪族のあいだに成立していたことを念頭に置くと、埼玉県稲荷山古墳から出土した鉄剣は畿内で製作され、銘文も畿内で刻まれた可能性がたかいたいであろう。

以上、記紀や鉄剣銘文系譜にみえる「スクネ」について粗雑な考察をくりかえしてきたが、大方のご示教をえて今後補訂してゆきたいと思うのである。

注

- (1) 佐伯有清氏「臣か直か―銘文と武蔵の豪族」(『歴史と人物』昭和五四年一月号)一三四―九頁。
- (2) ワケについては、佐伯有清氏「日本古代の別(和氣)とその実態」(『日本古代の政治と社会』所収)。ヒコについては(A)拙稿「日本古代氏姓制成立の前提」(『古代学』一卷三号)、(B)同「日本古代氏姓制の形成過程」(『歴史学研究』二九八号)。
- (3) 原島礼二氏「銘文の語る武蔵」(『歴史と人物』昭和五四年一月号)一四三―四頁。
- (4) 埼玉県教育委員会「稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報」一四頁。
- (5) 井上光貞氏「帝紀からみた葛城氏」(『日本古代国家の研究』所収)五五頁以下。
- (6) 直木孝次郎氏「奈良」(『岩波新書』六一頁)。
- (7) 阿部武彦氏「氏姓の起源について」(『歴史手帖』五卷一―二号)二八頁。
- (8) 井上光貞氏「日本国家の起源」(『岩波新書』一二四頁)。
- (9) 上田正昭氏「氏族系譜の成立」(『日本古代国家成立史の

研究』所収) 三一九頁以下。

- (10) 三品彰英氏『日本書紀朝鮮関係記事考証』上巻、二〇八頁。紀氏については、岸俊男氏「紀氏に関する一試考」(『日本古代政治史研究』所収) に詳しい。

- (11) 直木孝次郎氏「的氏の地位と系譜」(『日本古代の氏族と天皇』所収) 四七頁。

- (12) 井上光貞氏『大化改新』九一頁。

- (13) 歴史学研究会編『日本史年表』一二頁。

- (14) 佐伯氏、注(2) 論文。

- (15) 佐伯氏、注(2) 論文五頁。

- (16) ヒコの称号をもっていた豪族がワケを称号とする豪族の祖になっている点については、注(2) (A) 拙稿二二四—五頁で検討した。

- (17) 中田薫氏「韓国古代村邑の称呼たる啄評、邑勒、檐魯及び須祇の考」(『法制史論集』第三巻) 一二七—一六頁。なお、栗田寛『氏族考』上、七七—八頁でもこの説がみられる。

- (18) 太田亮氏『日本上代に於ける社会組織の研究』六九五頁。

- (19) 注(4) 一四頁。

- (20) 井上光貞氏「鉄剣の銘文—五世紀の日本を読む」(『諸君』昭和五三年十二月号) 四三—四四頁。

- (21) 拙稿「鉄剣銘文にみえる称号と姓」(『歴史公論』五巻五号) 八六頁以下。

- (22) この考えは注(21) 拙稿八六頁でも言及した。

- (23) 注(21) 拙稿、八二頁。

- (24) 注(4) 一八頁。

- (25) 注(21) 拙稿八六頁以下。

追記

井上光貞氏は、記紀にみえる雄略の父の允恭の世にクカタチ(盟神探湯)をやってカバネによる支配を強化したという伝説について、これはこのころから王権がカバネを制定したことに基づく伝説ではなからうかと指摘されているのは興味深い(『稲荷山鉄剣の問題』井上光貞氏編『日本古代史』ハテレビ大学講座テキストⅤ所収、六一頁)。クカタチについては、前之園亮一氏「大化前の姓制度」(『歴史公論』五八号所収、五四—五頁)にも指摘され、物部氏の勢力消長と関連づけられている点に注目される。

また、前之園氏は、右の論文四九頁で「ワケが首長を表わす一般的な称号であったのなら、葛城・平群・巨勢・蘇我氏などもワケを称してしかるべきであるのに、実際はそうではない。おそらくこれら大和の独立的大豪族は、服属の印として天皇・皇族の称するワケを中小豪族と等し、並に授けられることを嫌ったのであろうし、天皇も彼らにワケを強制する力をもたなかったのであろう」と指摘されているのも注意をひかれる。この指摘によって、畿内有力豪族はワケとは別系統の称号(スキネ)を称していた背景が理解できる。小稿脱稿後、前之園氏の高論に接したので、付記させていただいた。